—俳句からの創造—

染と書

—俳句からの創造—

染と書

2014年3月1日(土)～4月20日(日)

会場：染・清流館

「染」の三題噺

染色、書、俳句はいずれも日本人の生活に密着した、伝統的な民族芸術である。染色は、すでに正倉院御物に臈纈、纈纈、纈纈の三纈があり、その後辻が花や型友禅などを加えて、非常に発達した。書は中国に始まるが、平安時代に和風の「かな」がうまれ、小野道風、藤原佐理、藤原行成の三跡をうみ、本阿弥光悦などによって新境地が拓かれた。また俳句は、日本独特の短詩で、もとは俳諧連歌の発句（第一句）を指したが、明治期に正岡子規が新しい独立の詩形式として「俳句」の称を用いた。季節をあらわす季語や切れ字をよみこみ、日本的風月観をあらわすが、現代では欧米人にも好まれてグローバルな展開を示している。

本展はこれら三分野から三十六の作家ないし作品を選び、コラボレーションによって日本の美意識の特質を探ろうとするものである。

「閑かさや岩にしみ入蝉の声」（松尾芭蕉）。この句の「しみ入」は、英訳では penetrate（貫通する）または sink into（沈む）、仏訳では pénétrer または vriller（穴をあける）が用いられている。しかしいずれも「しみ入」の語感とは大きく隔たっている。わが国には「染」を用いた語が多くあり、例えば染みる、染まる、馴染む、染み染みなどだが、これらには共通する独特の感触がある。

日本では糸や布全体を染めることを「先染め」、無地の布に施す模様染めを「後染め」といって区別するが、この「後染め」が欧米で始まったのは、十九世紀にインドネシアの batik（蝋染め）が導入されてからである。したがって「先染め」を意味する dyeing はあるが、「後染め」にあたる語はなく、それを示す言葉として surface design がつくられた（一九七七年）。しかしこれはおかしい。なぜなら染色は単なる表面デザインではなく、布の内部まで染みるのだから。

この「染みる」は書にも通じる。書は和紙と墨の特質を最大限に生かす線の芸術であり、紙の内側から染みでる墨色に大きな魅力がある。この染みは、紙の性質と厚薄、墨の濃淡や粒子の大小、乾燥の度合、さらに温度・湿度の変化によって千変万化する。「する」的、「なる」的という言語類型に即していえば、書も染色も「なる」的である。

最後に、本展に協力して下さった染色家、および榎倉香邨さんが主宰する香瓔会の書家各位に心から謝意を表する。

染・清流館館長　木村重信

俳句との連携を試みる
染の視覚的展開を祝す

昨年清流会から「俳句からの創造、染と書」という展覧会が企画されていると聞いて、咄嗟に「さもありなん。やはりここまで来たのだ。」と思った。

というのは、さして染織や工芸のことを勉強してこなかった私ではあったが、かって『佐野猛夫蠟染作品』（ふたば書房、一九九一年）という本に「自然を見つめることの意義を深めた佐野猛夫の染」という一文を書いた時、佐野猛夫（一九一三、守山市～京都市、九五）は先輩に当たる小合友之助（一八九八、京都市～京都市、一九六六）や稲垣稔次郎（一九〇二、京都市～京都市、六三）に較べると、より絵画的になっていて、蝋染とか型染とかの染色作品であることをあまり感じさせないと思ったことがあった。そしてそう見てその後の染織の展開を見てみると、染織という意識を一方で強く育みながらも、染織は一方で絵画的になって幅広く展開しているように殊更に思った次第であったが、ここに至って「染と俳句」の展覧会が企画されていると聞いて、それが実証されたように思われたからである。

何故なら、この俳句と絵画の関係には歴史があって、京都の近代日本画史を見てみても、竹内栖鳳（一八六四、京都～京都市、一九四二）が俳句と絵画は同源であると説く俳画同源説を説き、自らも絵に俳句を添えた作品を制作する一方、門人たちにも俳句を行うように勧め、その画塾竹杖会から小野竹喬（一八八九、笠岡市～京都市、一九七九）や池田遙邨（一八九五、倉敷市～京都市、一九八八）が出て、竹喬は「奥の細道句抄絵（10点）」、遙邨は「山頭火句抄絵シリーズ」をそれぞれ晩年に描いた。それなのに現今の日本画界を探ってみても、俳句に興味をもつ人はあまり見当たらなくなっているようなので、もうこの嗜好は美術界では終わりになったのかと思っていたところ、ここに染と俳句が取り上げられるに至った。それで先に述べた染織の絵画化ということと相まって、「さもありなん。」と思ったのである。

言うなれば、近代絵画の伝統の一つは大袈裟に言えば、染に引き継がれているということであり、逆に言えば、染はそれ程に多様な展開をなしつつあるということになろうか。

思えばこの俳句と美術との関係は、ひとり栖鳳ばかりでは勿論ない。近代日本洋画の基礎を築いたといえる浅井忠（一八五六、佐倉～京都市、一九〇七）も、滞欧中（一九〇〇～〇二）には巴会（ともえかい）に参加するなどして盛んに俳句を制作したし、遡っては与謝蕪村（一七一六、大坂・都島～京都、八四）が俳画と言われるものを描き、門人の高井几董（きとう）（一七四一、京都～京都、八九）に当てた手紙に「はいかい物之草画」に自信を示して、《花見又平自画賛》（紙本墨画淡彩、軸、逸翁美術館蔵）のような傑作を遺した。そこには「みやこの花のちりかかるは光信が胡粉の剥落したるさまなれ　又平に逢ふや御室の花ざかり」（句意は、土佐光信の絵のように格調正しい都の桜とちがって、この御室の花盛りに来てみたら、浮世又平そっくりの飄々たる親爺に逢った。暉峻康隆校注『蕪村集／一茶集』日本古典文学大系による）とあって、絵と俳句、それに書は誠にぴったりと言いたいほどに合っている。

ところで「ぴったり」などと言うと、今度の展観を見て句を詠んで、こちらが生むイメージと作品が示す視覚的世界とがぴったりなものと、ややかけ離れているものとがあるようであるが、それはその後の俳画史を見ても同様のようで、例えば種田山頭火（一八八二、防府市～松山市、一九三九）の「分け入っても分け入っても青い山」を選んだ中井貞次さんの藍を中心とした作品は、連山の奥まりも見えて解り易い。対して坪内稔典の「多分だが磯巾着は義理堅い」を選んだ田島征彦さんの青をバックにした黄色と白の線的人影表現は、分かったような解らないような感じに見える。「多分だが」とか「義理堅い」とかをイメージ化するのは難しいことで、とてもぴったりなどとはゆかないのだろう。また上田日差子の「仮の世に色あらばこの桜貝」を選んだ本間晴子さんの散在するバラスに囲まれた枠の中の五本線という表現は、抽象的でそれこそさまざまなイメージを生んでゆく。従って申すまでもなく「ぴったり」が良いなどとは、ゆめ申せないことは、ここでも知らされるということになる。

なおこのような内容のこととは別のことであるが、選ばれた句の作者をみてみると、複数以上は楠本憲吉（一九二一、大阪市～東京都、八八）、鈴木明（一九三五、東京都～）、種田山頭火、松尾芭蕉（一六四四、伊賀～大坂、九四）、与謝蕪村で、楠本が2作・鈴木が5作の他はみな共に4作だったことがわかるけれど、これについて申すと山頭火・蕪村・芭蕉が多かったのは、さすが伝統という感じがするとまずは言いたい。そして鈴木明が多かったことについては、シュール的と言いたいこの種の傾向はいまだに意外と人気があるのだということを、あらためて知らされたと言いたいが、それを選んだ高谷光雄さんなどの作品が、いずれもどことなく解り易く思われたことをここに付言しておきたい。

大阪大学名誉教授　原田平作

もくじ

「染」の三題噺　木村重信……2

俳句との連携を試みる
染の視覚的展開を祝す　原田平作……4

（染）

市村冨美夫……10
福本潮子……12
本間晴子……14
繁田真樹子……16
髙見晴惠……18
大西陽子……20
井隼慶人……22
小川久美子……24
吉引ありさ……26
近藤卓浪……28
髙谷光雄……30
大嶋進……32
曽根亮子……34

（書）

小林章郎……11
中野宣子……13
原多詠子……15
三橋永青……17
徳岡敬子……19
山上きよ子……21
桧垣伸子……23
松高千鶴……25
互井佳寿……27
正橋白鷺……29
村上松月……31
近藤紫鳳……33
吉田美和……35

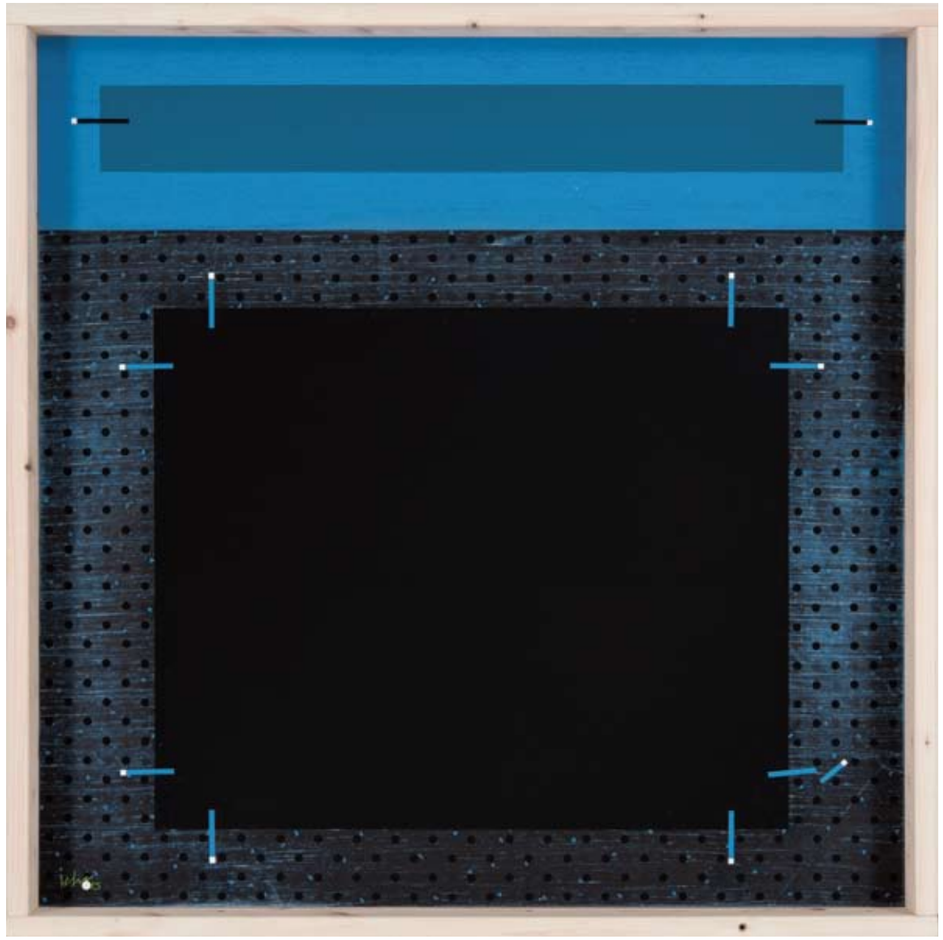
（俳句作者五十音順）

石田杜人……36
井上由美……38
小野山和代……40
森絵実子……42
喜多川七重……44
中井貞次……46
栗原知枝……48
田島征彦……50
木村菜穂子……52
倉内啓……54
兼先恵子……56
斎藤高志……58
山出勝治……60
髙橋寛……62
福本繁樹……64
賀門利誓……66
石田寿治……68
三浦以左子……70
むらたちひろ……72
澁谷和子……74
柳楽剛……76
加賀城健……78
内藤英治……80

坂部泰子……37
廣田蓬邨……39
林浩一……41
平位かよ子……43
高廣幸悠……45
榎倉香邨……47
古谷好啓……49
中村暢子……51
丸山宏信……53
平川紅舟……55
堀田一逕……57
藤井直子……59
山田静草……61
原奈緒美……63
越川一香……65
牧野聖雲……67
後谷芳琴……69
大愛魚苑……71
岩永栖邨……73
鳥飼玉翠……75
西川壽一……77
野村崇……79
大﨑水愁……81

作品情報

素材／技法
縦×横cm（額含む）



絹(真綿紬)／シルクスクリーン
95×95cm

手をついて見よとや露の石ぼとけ

安東次男

市村 冨美夫

見ようとする意志のない目には
見えるものも見えない
まして見えていない奥のほんとうの存在は
さらに見えない

少しづつ見えてこないと
続けられない世界にいる

しっかりと見なさい
五感をひらきしっかりと見なさい
との教えである

60×59cm

小林 章郎

路傍にひっそり立つ道祖神であろうか、そのそばに立つと、腰をおろし、しゃがんで話しかけたくなる。そんな石佛の姿を連想する。

石佛の素朴さを思い浮かべながら、ふくらみのある線で、おだやかな姿を、本紙に対し比較的広いマットを配して求心的に焦点をしぼり、その中に立つ石佛の温和な姿を求めた。

じゃんけんで負けて蛍に生まれたの

池田澄子

パイナップルピーニャ、和紙、竹／
藍染、絞り、しみ染
120×120cm

うちわ制作　京うちわ「阿以波」

福本 潮子

夏の初めに蛍が出るのを、私は楽しみにしています。蛍は、京北の我が田舎家の横の小川には毎年みられ、京都市内の自宅の前を流れる紙屋川にも近年チラホラ出るようになりました。蛍をみると和泉式部の歌を思いだす私は、現代的なこの俳句に出会って、平安時代も現代も女性は蛍に魂をみるのだと思いました。日本の藍の鮮明なグラデーションで私は光の表現を試みてきました。蛍の小さな光は藍染の絞りの点がふさわしいのです。なま暖かい風が吹く蛍の季節に「うちわ」が似合うと思います。

60×60cm

中野 宣子

難しい題材をいただいたというのが第一印象でした。日頃、書作をする時に選ぶ題材と異なっていたので悩みました。

繰り返し何度も読み、心に残ったのは、〝命〟でした。蛍の命、命とは、…じゃんけん、負ける…頭の中で言葉がぐるぐる巡っていきました。作者の思いと離れているかもしれませんが、はかない命から懸命に生きる命へと思い、蛍をいとおしむ心境になり、〝命と輝き〟を願い制作いたしました。

仮の世に色あらばこの桜貝

上田日差子

〈 PAZRUKA-53-HIZASHI 〉

絹布地、木ボード、木フレーム、タイル／
ドローイングプリント
72×72cm

本間 晴子

春を思わせる暖かな日差しの中で海辺の桜いろを手のひらに愛でる。日本の春に代表的な桜の花、満開の美しい季節を心待ちにしつつも桜貝のはかない可憐さが同じ桜いろが心にふれる。冬の荒くも静かな海に心は暖かい。こんなイメージが浮かぶ。何より日差子（ひざし）と読ませる作者の名にくすぐられる。太陽の光、日差しの中で色彩を浴びる。うすくこくやわらかくつよく様々に。作品は俳句から浮かんだ作者のイメージかもしれない。

60×60cm

原 多詠子

仮の世、すなわち現世は、楽しいこと、悲しいこと、思い悩むこと、苦しいこと等、気持ちがゆれ動くことばかりです。桜貝のような淡い色に人生のはかなさや、切なさを表現するため、細目の線質にし、波にただよう桜貝を印に見立て、全体の雰囲気を淡い色調にしました。

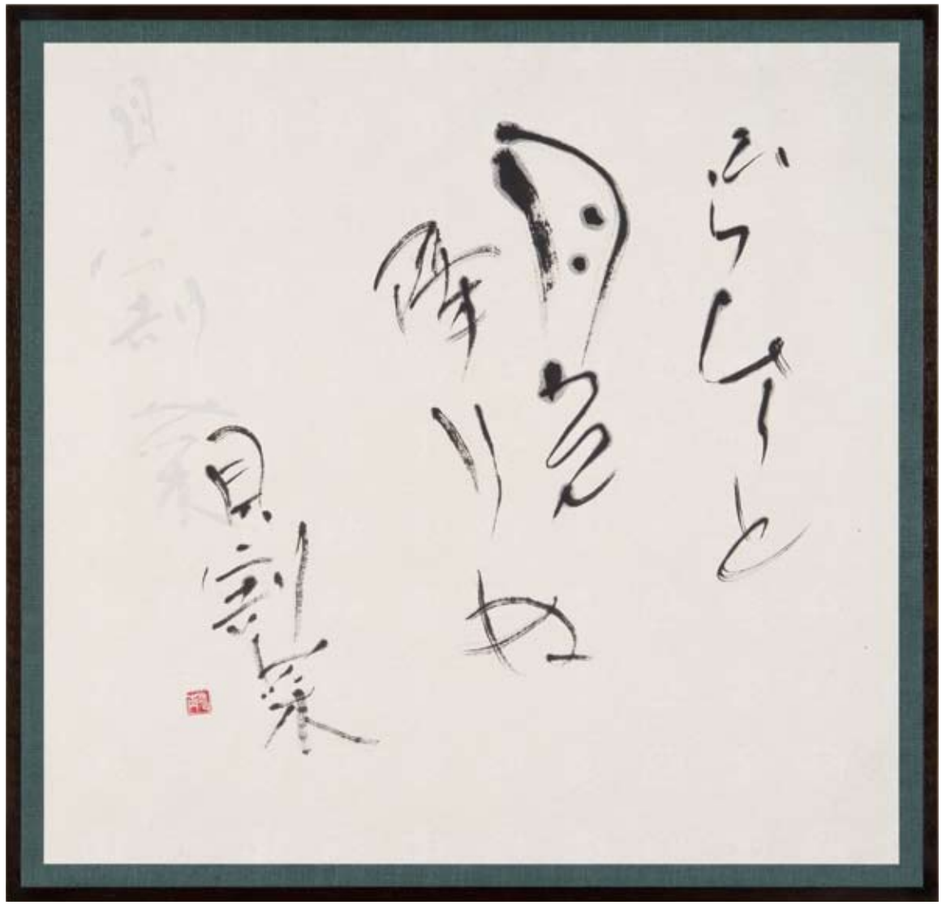
ひらひらと月光降りぬ貝割菜

川端芽舎

絹／蠟染
160×100cm

繁田 真樹子

太古から宇宙に浮かぶ穏やかな月と、これからという幼い芽の出会い。この俳句を数あるなかから選んだのは、詠んだ時に、すぐにこの世界が風景として鮮やかなイメージとなり浮かんできたからです。貝割の双葉がひらひらとまるで蝶々のように舞う月夜の静かな世界をカーテンの隙間から垣間見ているような作品を制作しました。文字よりも絵として表現する方が相手に伝わるものもありますが、俳句とは、5・7・5文字で十分に伝わることにあらためて感心しました。



58×60cm

三橋 永青

清楚な貝割菜を月光が明るく照らしている。月のさす光とそれを受ける葉が共に、ひらひらという動きとして表現されている句に神秘的な風景を感じるも、メルヘンチックな表現を試みた。

「月」の表情を出す為に、文字形・筆の太さ・紙質を考えた。

表具は、出来るだけシンプルに。

赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐

綿布／インスタレーション

髙見 晴惠

この作品は、見えているそこにではなく、実存しない十七文字の内なる世界に実在する細く切った布をインスタレーションすることなのだとおもった。それを実現するためには、ウチとソト、アルとナイのような、相対する双方を同時に見据える眼と同一点にそれらを存在さす力が必要だと思う。私はその為に新たな意識を自身のなかに呼び起こさなければならないだろう。

60×60cm

徳岡 敬子

美しい風景描写としてとらえ、すなおな気持ちで景色を思い浮かべ、やわらかくゆったりとした表情が出せたらと願い、色彩が重なっている様に立体感を持たせたく、二枚の書を少しずらして重ねるなどして、下の文字が写るように試みました。

かじかみ聞く虐げられしものの辯

楠本憲吉

麻布、反応性染料／蠟染
120×97cm

大西 陽子

せまる夕暮れに
影はしっかり育っていった
あの太陽と約束しておけばよかったのに

53×59.5cm

山上 きよ子

演目は、ドストエフスキーの『虐げられた人々』
舞台もしくは銀幕に流れる俳優の科白を、作者はかじかんだ手をさすりながら、懸命に追っている。暖房もない小さな劇場。
貧しく、どこか明るかった時代の小景を、紙面の下方に蹲るように字を置きつつ、その先に光を感じられるものに、と形にしました。

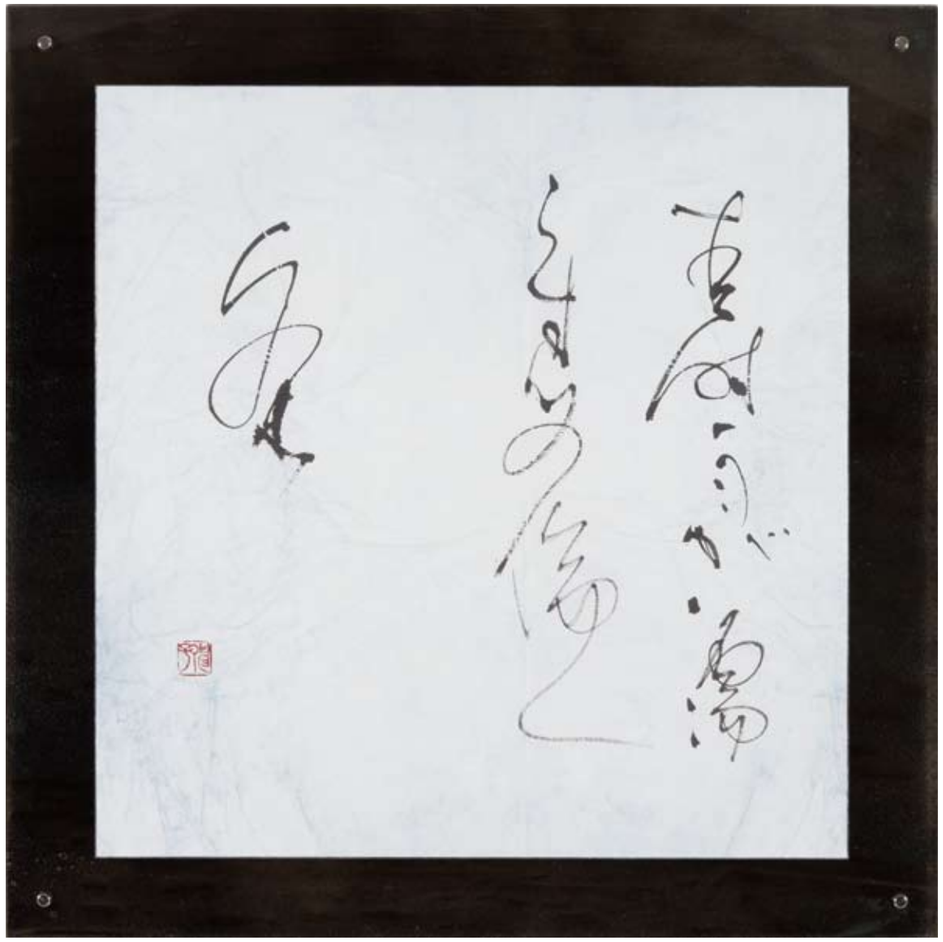
春時雨が濡らす心の傷一条

楠本憲吉

綿布／蠟染
160×86cm

井隼 慶人

句からのイメージに基づきましたが、思いは色々と拡がりました。



60×60cm

桧垣 伸子

染色作品とのコラボという、初めての経験で、なかなかイメージが沸かず、どう調和させられるか、自分なりに考えて「余白」を意識して作品構成した。

句の内容は、春の俄か雨で憂鬱になり、心の古傷を思い出したというものであり、そのイメージに合うよう、紙は淡いブルーに染め、細身で弾力のある線を出したいと思った。

涼風の曲がりくねって来たりけり

小林一茶

小川 久美子

細い路地をぬけて吹き込んでくる涼風の様子を、「何か良い知らせが舞い込んできた」というイメージで表現してみました。

麻、反応性染料／型染
180×60cm

松高 千鶴

爽やかな清々しい風が、今私のもとへやって来た。目に見えないものを、生き物のように捉え、動きや温度感、立体感までもが感じられた。切れのある線と動き、字粒の大小、行間の広狭で清々しさや立体感を、墨色の変化で「時」を感じられればと試みた。

60×60cm

永き日のにはとり柵を越えにけり

芝不器男

麻／糊防染
110×72cm

吉引 ありさ

にわとりが柵を越えた。そんなことが事件になるほど何もない春の一日。すこし霧掛かったおだやかな庭先で、餌をついばんでいたのか、何かの弾みでぽっと柵を越えてしまったにわとりを、必死で追いかけるわけでもなく、にわとりも必死で逃げるわけでもない。他にはこれといって何も起こらない、やるせなく長い春の一日が目に浮かんだ。

この句に流れる時間は永遠のようでもあるけれど、彗星に喩えられる夭折の俳人不器男の生きた時間を思うと、白昼夢のような儚い一瞬であったようにも思う。

60×60cm

互井 佳寿

句の解釈を　文字通り表面的に捉え　単純に表現した。まず躍動感のある作品にしたいと思いたち筆は、コシの強い　黒山馬の細身の筆を使用し　墨は、濃墨を使用し　用紙で柵のイメージに合う柄を選びましたが　今一つ線の複雑さが不足した。

鐙金もろくて涙脆くて金亀子

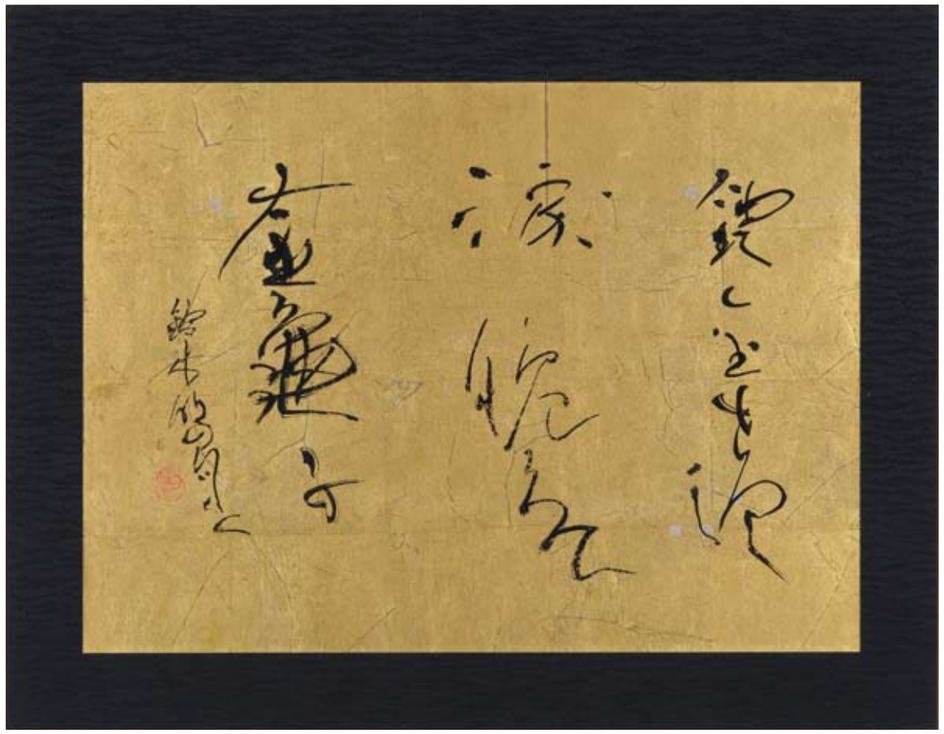
鈴木明

麻／蠟染、反応染料
120×120cm

近藤 卓浪

この句を選んだ一番の理由は今、自分が表現しようとしている「見立てと変化」にぴったりと重なり合う響がしたからです。

見立てのみならず、それにまつわる心情を表現したいと思いました。



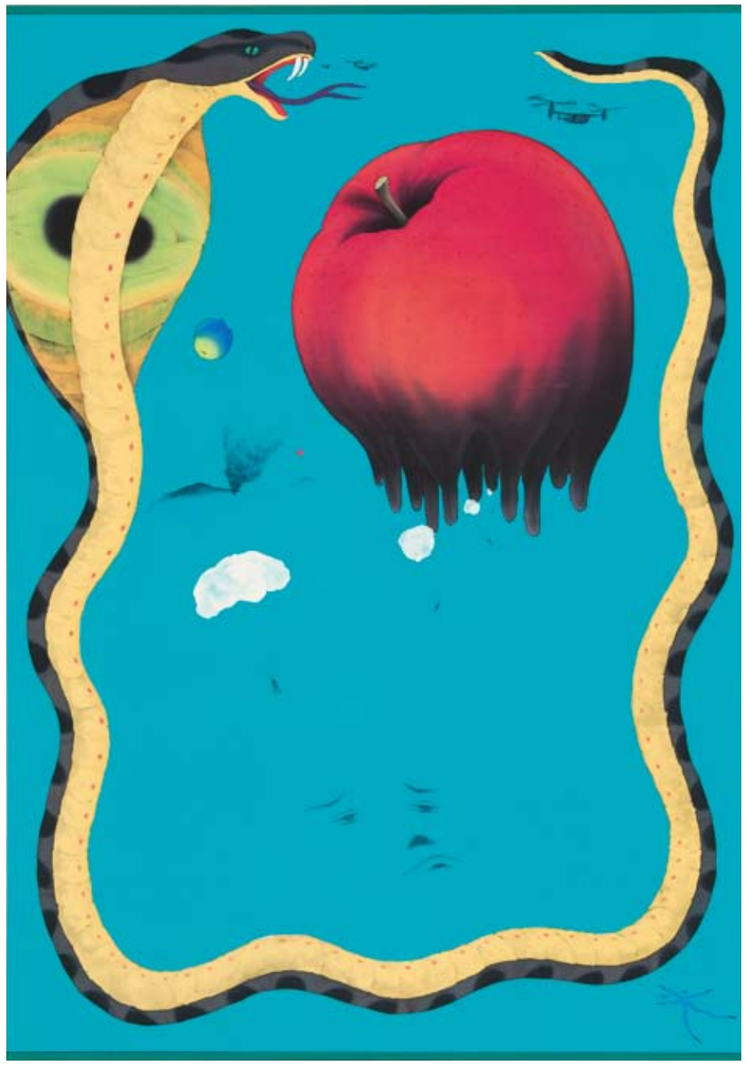
46.5×60cm

正橋 白鵞

夏の夜、鐙（ともしび）のあかりの下に集まる金亀子（こがねむし）。光と闇、鐙を求めて集まる金亀子の羽音と夜の静寂さ。その情景に作者の心情（涙脆く）を重ねたこの句を　甲虫の肌合いに似た料紙の上に　濃墨を使い、静かでありながら華やかな表現を心がけて書いた。

どこからが戦後舌出し蛇いそぐ

鈴木明



絹(白山紬)／蠟染
122.5×85cm

髙谷 光雄

世界中で話題になっている小説「見えない雲」の作者ドイツの作家グードルン・パウゼヴァングはチェルノブイリ原発事故後、ドイツで何か起ったとき子供や孫から「おばあちゃんはそれまで何もしなかったの?」と言われないように、自分が生きている間は警告を続けると語っている。

今日本では気になる様々なこと(原発、憲法、秘密保護法、沖縄基地、靖国参拝…)が起っています。

僕だったら何が出来るのか?

どこからが戦後なのか?

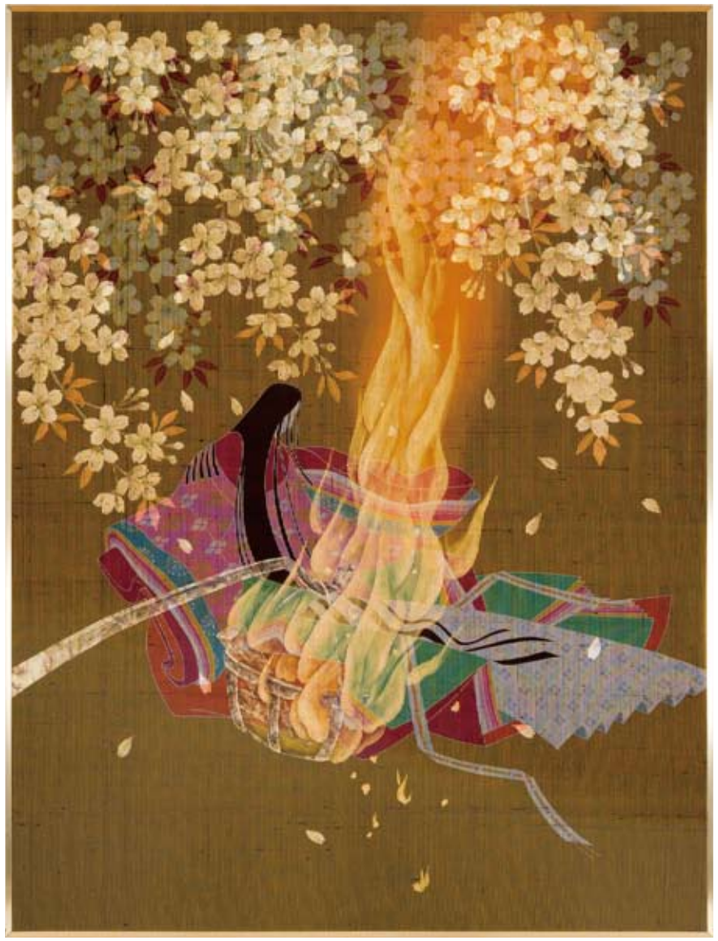
60×60cm

村上 松月

「蛇」と言えば拒絶反応を起こす私にとってこの句から作品のイメージをすることは、大変な事でした。この句の解釈を考えていくうち「時の流れ・移ろい」を感じ始めました。戦後めざましい発展の中で色々な事に翻弄されながらたくましく生きていく人々。その「生」を強く感じる句だと。紙は墨染めで、面構成は遠近法で、これから立ち向っていこうとする強い姿勢を濃墨と固めの筆で、カラッと明るく調和体風に書き上げました。

花篝何もなかったかのように

鈴木明



大嶋　進

昔から単衣の季節に着用する無双と云う着物があります。

紗の生地を二枚、表と裏の色を変えて染上げ、それを重ねて仕立て上げる事によって、モアレが生じ、立体的に動きが表現されます。今回の作品は、その原理を利用し、激しく篝火のように燃え揺れる恋心を、何気なく・絵具では不可能な・染色でしか出来ない透明感のある微妙な表現を試みました。

この企画に声を掛けて頂き嬉しく感謝いたします。

絹(紗・紬)／蠟染、無双(紗合せ)
154×117cm

近藤　紫鳳

「春のひだまりの中、ぼんやり櫻の花を眺めていると、先夜の宴のにぎわいが夢のように思われる」と句を解釈しました。

まず春の明るさ・ぬくもりの空間を先夜と区別する為、薄墨の円相で包み、左下半分に余白を充分とり、青空の爽やかさを表現。そして折り紙の櫻の花二輪にスポットをあて、春の日射しの明るさを、花弁の舞いに風のそよぎを試みました。金の額縁は、先夜の宴の華やかさの名残のつもりで使用しました。

60×60cm

裸木とアンナカレーニナ佇つ駅頭

鈴木明

麻／型染
218×72cm

曽根 亮子

家の近くの坂道に、メタセコイアの並木があります。

春の新緑、秋の紅葉と季節ごとに違った表情が見られ、時の移ろいを感じさせてくれます。葉が全て落ち、夕暮れを背景に美しい樹形がシルエットとなって見える冬の並木道に私は惹かれます。一瞬、どこか外国の見知らぬ場所に迷い込んだような感覚に引き込まれてしまうのです。

60×60cm

吉田 美和

カタカナの入った作品は初めての挑戦でしたし、四角い漢字の多い句は大変苦労しました。

この句は、黒の闇にのまれていく赤のイメージでした。アンナカレーニナの純粋な心と、情熱的な恋と、自らの命を断つ選択をした事を色、形で表現しました。

夕映えを戦死者回収隊よぎる

鈴木明

木綿／蠟染
102×114.5cm

石田 杜人

父は戦争で片腕を失った。御賜の義手があったが、付けているところは僕が幼い時に一回見たことはあるが、それ以外は見たことがない。戦場で片手を飛ばされた時は意識を失い仮死状態で、夜の休戦の時の回収隊に見つけてもらい命を拾われた。故に誕生日は二つあり、復活の日を通例にした。戦友が亡くなった話は臨場感を持って話すことが多かったが、時々、何かが過るように言葉をつまらせる。そして悔んだ。句の作者は僕の師である。その俳句から父を近くに引き寄せイメージが成立した。

60×60cm

坂部 泰子

「戦死者回収」このことばを目にした時、昨春、仙台から青森まで桜を訪ねて行く途中立ち寄った「八甲田山」。高い雪の回廊を通りながら、新田次郎の小説を思い浮かべた。そして、遠い日に父から南方で散華された人達の話を聞いた記憶が思い出されこの句に重ねた。この強い響きを放つことばを大きく漢字表現にして、厳しさや無念さを表わしたいと願い、かな表現で書いた部分は、愛おしく思う心を表現しようとこころみた。

夏みかん酸っぱしいまさら純潔など

鈴木しづ子

井上 由美

大らかな性愛を題材とし、賛否語り継がれた伝説の俳人鈴木しづ子。奔放でありながら、冷徹さも併せ持つ彼女の句が戦後の厳粛な俳壇に一石を投じ話題となった。

そのさなか、忽然と姿を消したしづ子。様々な憶測が囁かれ、結果的に彼女を伝説へとのし上げる事となった。

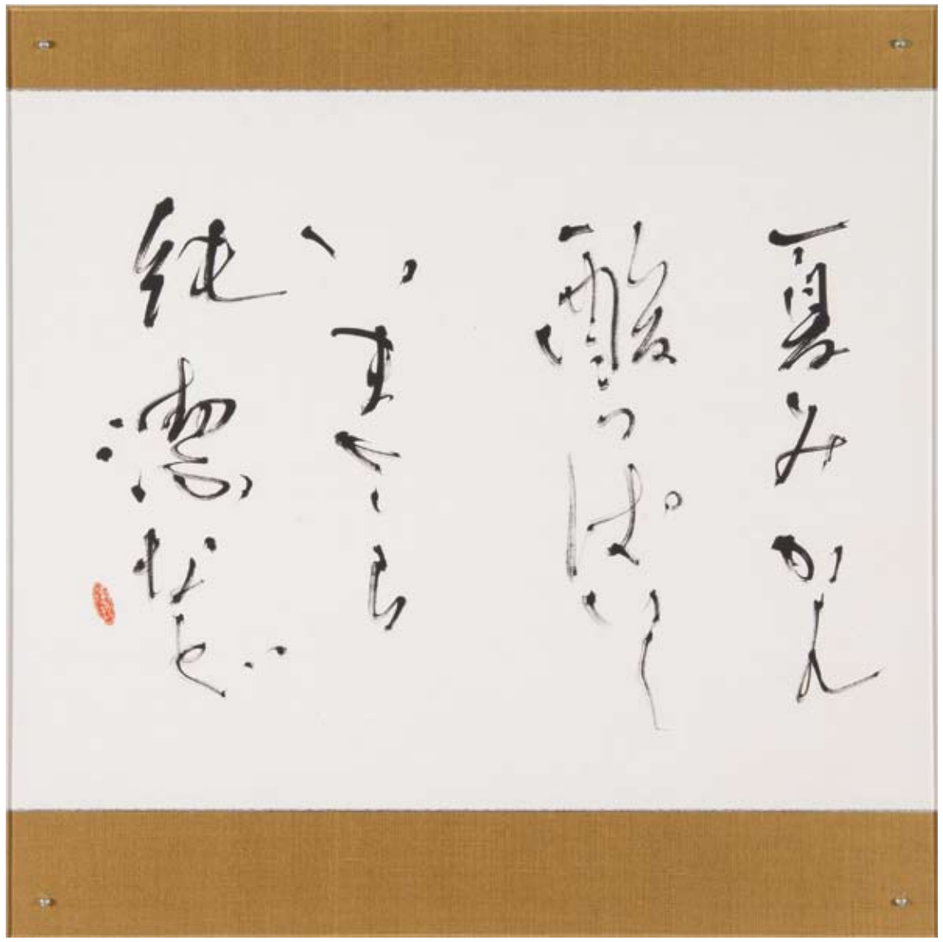
時を経て今残された彼女の一句から、私なりのしづ子像を垣間見たような気がしている。

〝いまさら純潔など〟

変わってしまった自分への嘆き、一方で精神だけは純潔でありたいという反意的誓い。

時代に翻弄され続けた女の悲哀、情念、清純性、彼女の句からそんなものを感じている。

絹／
蠟染、糊防染
200×113cm



廣田 蓬邨

夏みかんの甘ずっぱいさわやかさを表現しようと思った。そのためには明るい作品となるように中央に渇筆を取り入れ、後半は作者の強い意志が出せるように墨を多くした。また字形は、懐を広く取りながら少しとぼけた雰囲気を出したつもりである。

60×60cm

爛々と昼の星見え菌生え

高浜虚子

ポリエステル布／布を折りたたむ、染色
145×92cm

小野山 和代

虚子は、このような意味のよくわからない句を残している。批評家は、昼の星を金星とか火星とか解釈しているが、本当のところ昼間に星が爛々と輝いているはずはない。虚子の星を見たような幻想と私の２０００年以降の制作テーマ「光」はどこか重なる。

60×60cm

林 浩一

昼の星なのでファンタジーとしてとらえましたが、少々難解な感じでした。

天の星と地の菌は、空間意識と立体感をイメージさせるテーマでしたので、表現方法も紙は重ねて使用し、文字も拡がりを出したく、はみ出して横に、重ねて縦をと試みてみましたが…ご覧の通りです。

あるけば草の実すわれば草の実

種田山頭火

シルクサテン／
蠟染、ステンシル
48.5×59cm

森 絵実子

私は植物のように生きたい。
彼らは降り立った土地で種を芽吹かせ環境を全て享受して生き、日向と日陰があれば日向に自然と枝葉と思考をのばし懸命に生きるが、滅ぶときは滅ぶ。
そんな潔い生き様を家の片隅で観察していると高尚にすら思えてくる。

山頭火の句をよんでいると、この植物の生き様と重なっていく。
彼の願いは、ただ二つ。
本当の自分の句を作りあげることと、他の一つはころり往生。

思考に翻弄され彷徨いに彷徨うが、行乞の暮らしの中から嘘のない素朴で澄んだ文体で綴られており、時に滑稽で愛しく感じさせる。

60×60cm

平位 かよ子

山頭火の行乞流転の旅の想いには至りませんが、私はこの句を、くっつき虫が衣服にたくさんついている様子を楽しんでいると捉えました。
表具は前方に浮き上がるようなイメージで考え、全体に明るくすっきりとした作品にしたいと思いました。

ぼうぼううちよせてわれをうつ

種田山頭火

絹布、植物染料、酸性染料、顔料／蠟防染、型染、ステンシル、抜染、縫い合わせ
120×88cm

喜多川 七重

山頭火、死の前年1939年の四国遍路時の句。太平洋に向かう57歳の彼に何が打ち寄せ打ったのか。唸る波風とは対照に不安や苦渋をも飲み込む「開かれた深い静けさ」をこの句に感じた。

彼10歳時に母の自死以降、破産、一家離散、弟の自死、関東大震災で罹災、冤罪拘留などを経て出家、44歳で捨身懸命で行乞放浪の生活に入る。衝動的型破りな彼の性質から日常は破戒→懺悔→自戒→破戒を繰り返すが句作は毎日毎夜続けた。

彼が顕現させたかったもの、それは「救いのかたち」ではなかったか。この開かれた沈黙の表現が失明したミケランジェロが死の前年に手探りで木端に彫ったキリスト像のそれと重なりその形を借りた。

行乞放浪の表現として土台布に2007年制作「出立」を染め替え用いた。

60×60cm

髙廣 幸悠

今回は線の強さと文字の省略を主に作品に取り組んだ。作品は左右に大きな白の余白を取り中央部分三行書きでやゝ行間を狭めながら行頭部分に墨の集団を考え重心を高くしながら全体が一つの墨の固まりに見えるようにと思いつゝ作品を制作したが駄作に終った。

分け入っても分け入っても青い山

種田山頭火

中井 貞次

この句は、山頭火の日本風土をずばり吐露した自然感ではなかろうか。

山は青い。青く見えるのは樹々の繁茂による。樹々は水源があるから育つ。水は光の屈折により青く見える。

青は藍より生ずる。その藍は如何様にも変化し得る可能性を持つ。

水性日本の風土色は、まさに藍を基調とする青。その藍を頼りに染め続け、山頭火の〝青い山〟の心境に辿り着きたいと思う。

生平(麻)／蠟防染を施し、藍を基調とした浸染法による染色
175×118cm

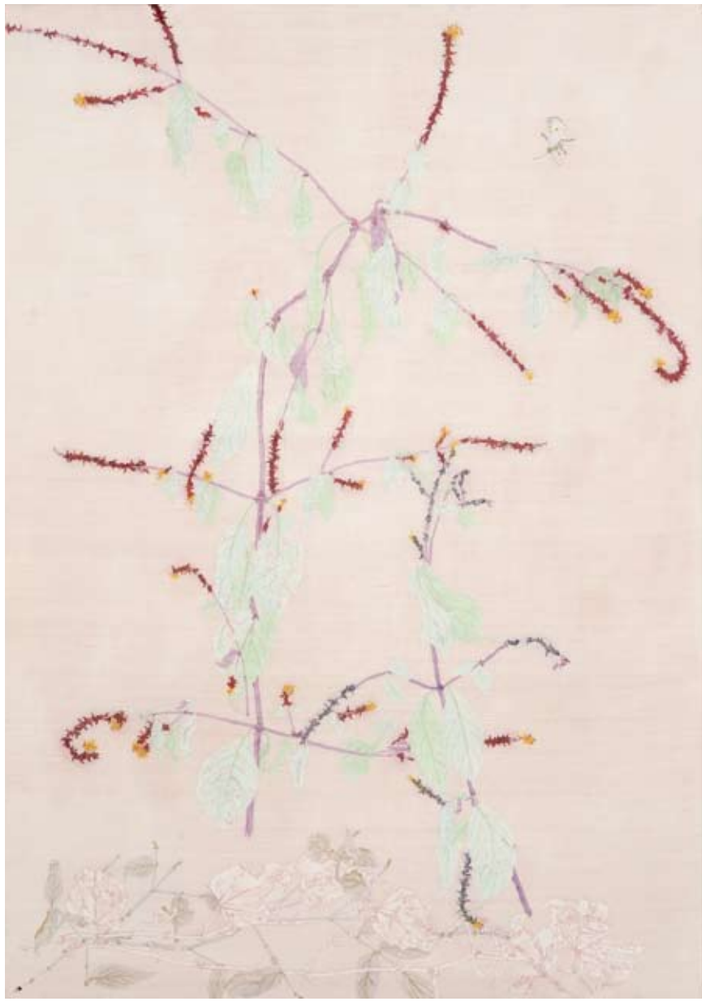
榎倉 香邨

重畳たる新緑の青い山（高千穂）に向って「分け入っても」を繰り返す山頭火。その鮮烈なしかも力強く求めてやまぬ「歩々到着」の山頭火。その激しいまでも力強く自信に溢れた脚音を聞く思いがする。

60×60cm

わたしと生まれたことが秋ふかうなるわたし

種田山頭火



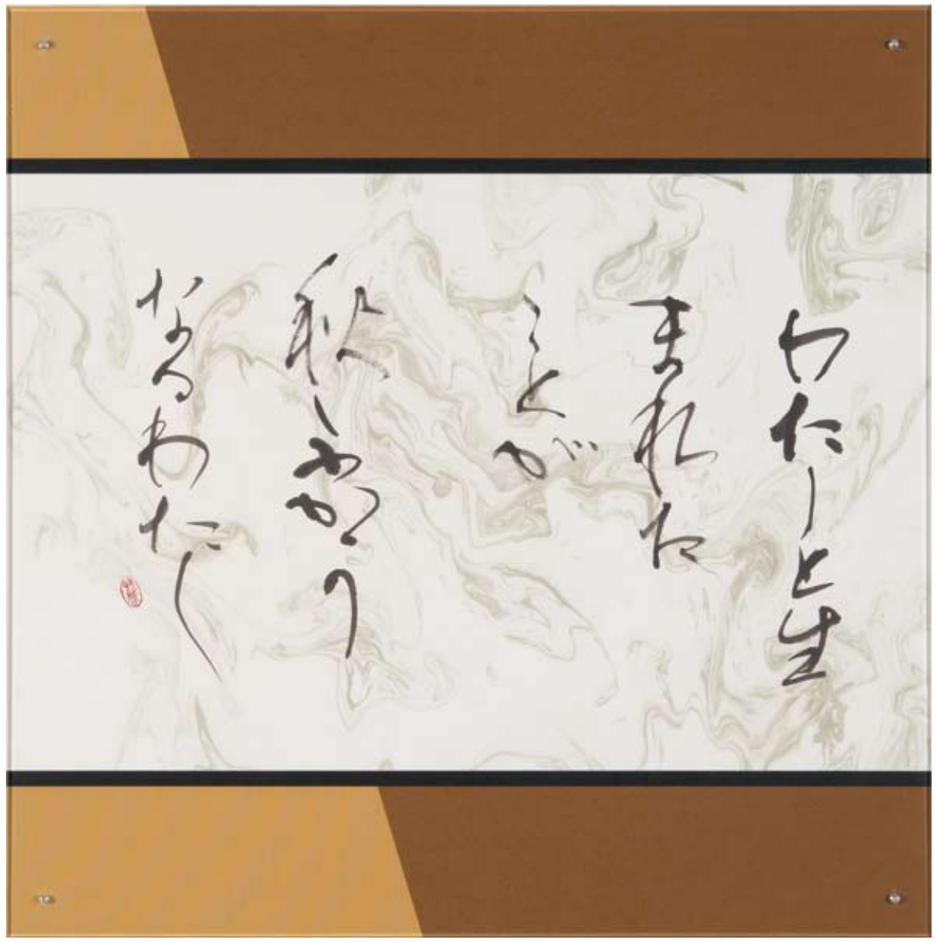
麻／蠟染
160×108cm

栗原 知枝

私には写生で在ろうと、無かろうと、一瞬の時間・空間を切り取った場面であり、俳句は最も説明なき私的と思える。文字の連らなりを考えると説明で絵解きに、只、其処に本当は無い気がする。

句を選んだ瞬間、私の中で切り取られた世界から、説明や言い訳を切り捨てた時、私にとってのこの句が現れた。

山頭火と肌とは厚かましい、息が触れる、否、せめて足音が聴こえる場所に、佇めていたら…と思える。



60×60cm

古谷 好啓

元来旅が好きだった山頭火は常に母の位牌を風呂敷に包んで持ち歩いていたと云う。少年期に理不尽に失った母の死（自殺）の喪失感や深い苦しみとともに生き続けたのだろう。このどろどろとした憂いの気持ちを表現するために紙は墨流しで淡墨とした。マットは秋の「深まり」と「不幸」を重ねている事から秋色っぽくし季節の移ろいを表現する為に二色とした。そして山頭火の気持ちを切りさく為に斜めに筋を入れた。

多分だが磯巾着は義理堅い

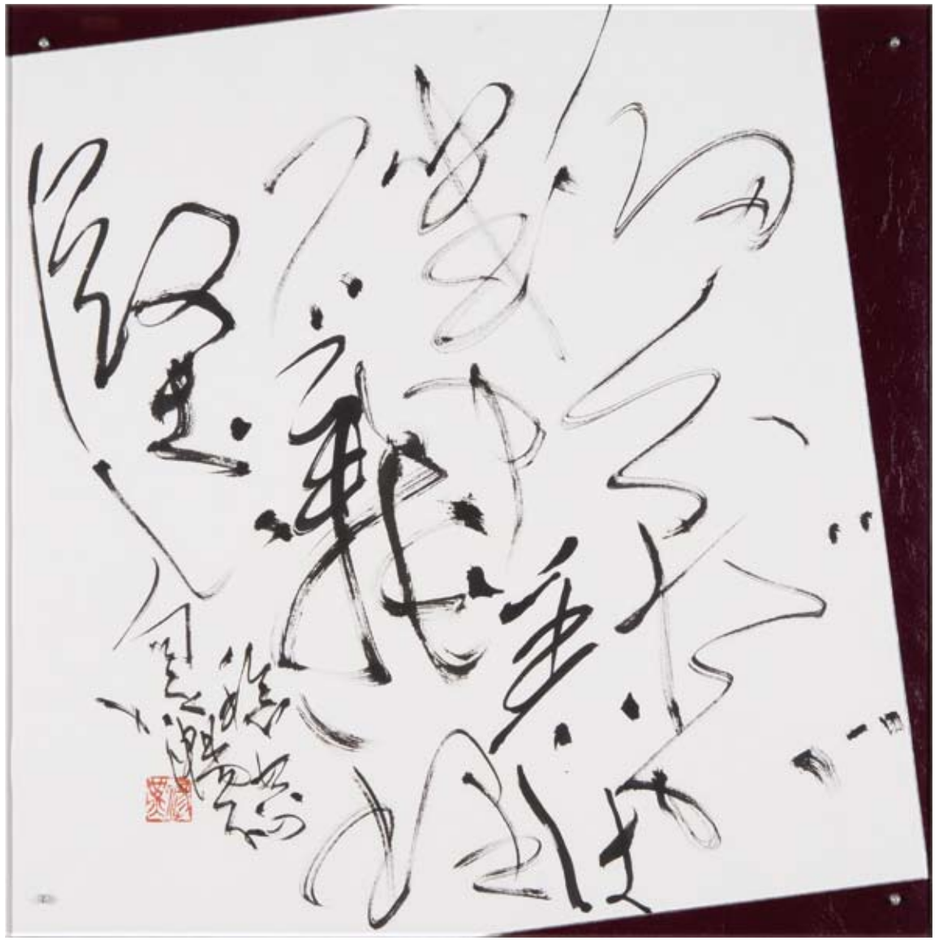
坪内稔典

木綿／型染（樹脂防染法、着抜法）
121×112cm

田島 征彦

坪内稔典の作品はシュルレアリスムな世界へ突き進んでいるように考えます。上の句から下の句の移行が突然で、まさにシュルレアリスムです。ぼくは同じ「船団」の池田澄子の「じゃんけんに負けて蛍に生まれたの」も好きです。これも多分にシュルレアリスムだけど、池田がマックス・エルンストだとすると坪内の〈移送〉的表現はルネ・マグリットかと思います。ブルトンの〈自動速記〉が俳句の世界へ突入したのかな？

しかし、ぼくの作品はまだシュルレアリスムに到達できないままに苦しいあがきを見せてしまうことになってしまいました。



60×60cm

中村 暢子

書は文字を素材とする表現活動である。しかし「言葉」に意味がある以上全く無視することもできず、どうにかしてその意味やイメージを表現したいと願う。

この作品においては可読性は求めず、線を絡めて外へ外へと動いていくもの、「文字」というより「線」によって『幾何学模様』のような表現を狙った。

その中に俳句の印象的な『磯巾着』が観者の眼に浮かんできたのなら幸いである。

林檎の木ゆさぶりやまず逢いたきとき

寺山修司

木村 菜穂子

寺山修司といえば広くは短歌の人として知られるが「花粉航海」には寺山15歳時の俳句が収載されている。

ともすると危険な、思春期の少年の青い激情をむしろ愛おしく感じられるのは、敬愛する寺山が逝った年齢に私自身も近付きつつあるためかもしれない。

その句のような「蒼さ」を秘めたまま、全速力で時代を駆け抜けた人でもあった。

白山紬、酸性染料、顔料／ステンシル
143×122cm

丸山 宏信

恋しい人に逢いたいけれど逢えない切なさ、それを淡墨でにじみを生かして表現してみようと考えた。あまり字形にこだわらず、リズムに乗って書くことを大切にした。

激しい情熱が、暖かいにじみの広がりと共にやさしさへと変化し、「あなた」への想いとして染み込み広がり伝わっていくことをイメージした。暖かな線条を表現するために、墨は松煙を淡墨にし、筆は極めて柔らかい羊毛を使った。

60×60cm

しら梅の泥を破りて咲きにけり

照井翠

麻紙、墨、顔料、銀箔／型染(糊防染技法)
204×124cm

倉内 啓

東日本の大震災から三年経ちますが、私はいままでこの悲しみを正面から対峙する事に躊躇し、どちらかと言うと避けて来た様に思います。これまで見て来た数々のメディア画像があまりにも痛ましく、現実的なものとしては到底受け入れる事が出来なかったからです。しかしながら、この句集（照井翠『龍宮』）に遭遇し確かなリアリティーを突きつけられました。哀しき世界（げんじつ）に何らかの意志を示す事が、今を生かされている表現者としての責務だと感じました。

60×60cm

平川 紅舟

今咲いた一輪の白梅。寒さに耐えた蕾が開くとき、宇宙をも包み込みそうな内に秘めた強さ、それでいて、どこか、そこに可憐で、いとおしい梅の花に思いを寄せ、作品作りに取り組んだ。

左側に黒を配し、つきぬけたその先にある白の空間にさわやかな線をもって構成した。黒から白に動きがあればとの思いから、パネルの形に工夫を加え、見る人が移動することによって生まれる効果が得られるのではないかと考えた。

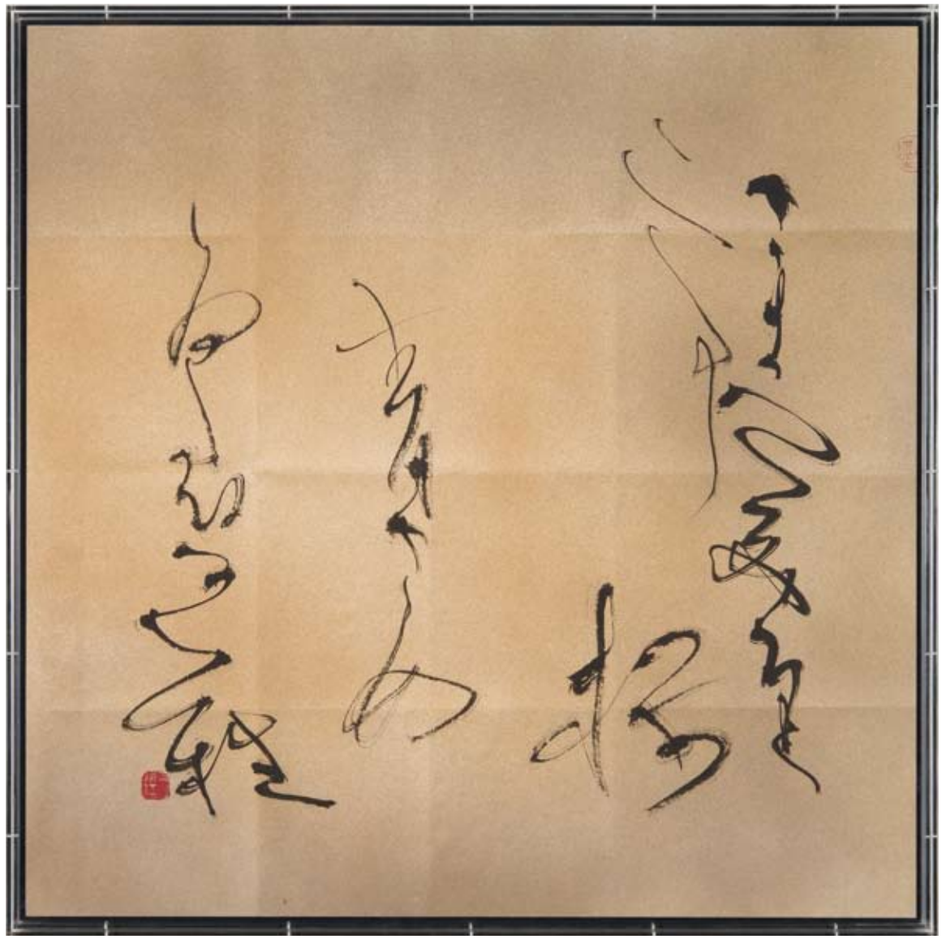
さきみちてさくらあをざめゐたるかな

野沢節子

麻布、反応性染料／糊型染及びステンシル
200×90cm

兼先 恵子

ぞくっとした。
目が心がそこに留まった。
平仮名ばかりの嫋やかな表記とは
裏腹な妖しく清冽な色彩が私の感
性の琴線を捕まえてしまった。
桜と対峙する芯の強い女の情念が
透けて見えた。



60×60cm

堀田 一逕

満開の桜に散り始める寸前の翳りと緊張感を感じる句としてとらえました。山馬の筆を破筆するタッチで、はかなさの中に強さを出し、兼先先生の作風を拝見して紙は焼き金風の紙を選びました。右上端に遊印で楽しみ、作品を立体的に見せる為、黒色の台にアクリルに入れて浮かせました。
心魅了される句に邂逅出来て幸せでした。

何事の心いそぎぞ秋の蝶

正岡子規

斎藤 高志

蝶が好きだ。
いい歳をして、年に何度かは捕虫網を手に蝶を追いかけている。

10月も半ばを過ぎたある日、近所の川原を慌ただしく飛ぶアカタテハの姿が、目に入った。
その時、「子規が詠んだ蝶は、アカタテハであった。」との思いが浮かんだ。

アカタテハは極普通種であり、あまり気に留めることが無かったが、この機会に改めてよく観ると、その美しさに魅了された。

麻(生平)、反応性染料、金箔、銀箔、銅箔／
捺染、摺箔
160×78cm

藤井 直子

慌ただしく心落ち着く間もない日々の中、まさしくそれはせわしなく飛ぶ秋の蝶のようですが、現実とは裏腹に「いつも優雅でありたい」と願う自分自身を蝶に重ね合わせ、それを表現できれば…と考えました。
草むらから、ふんわりゆったりと浮かび上がる蝶に見えるでしょうか？
（作品効果を高める為に、本紙の下に秋の蝶の絵を讃岐漆芸・若手作家の方に描いて頂きました。）

60×59.5cm

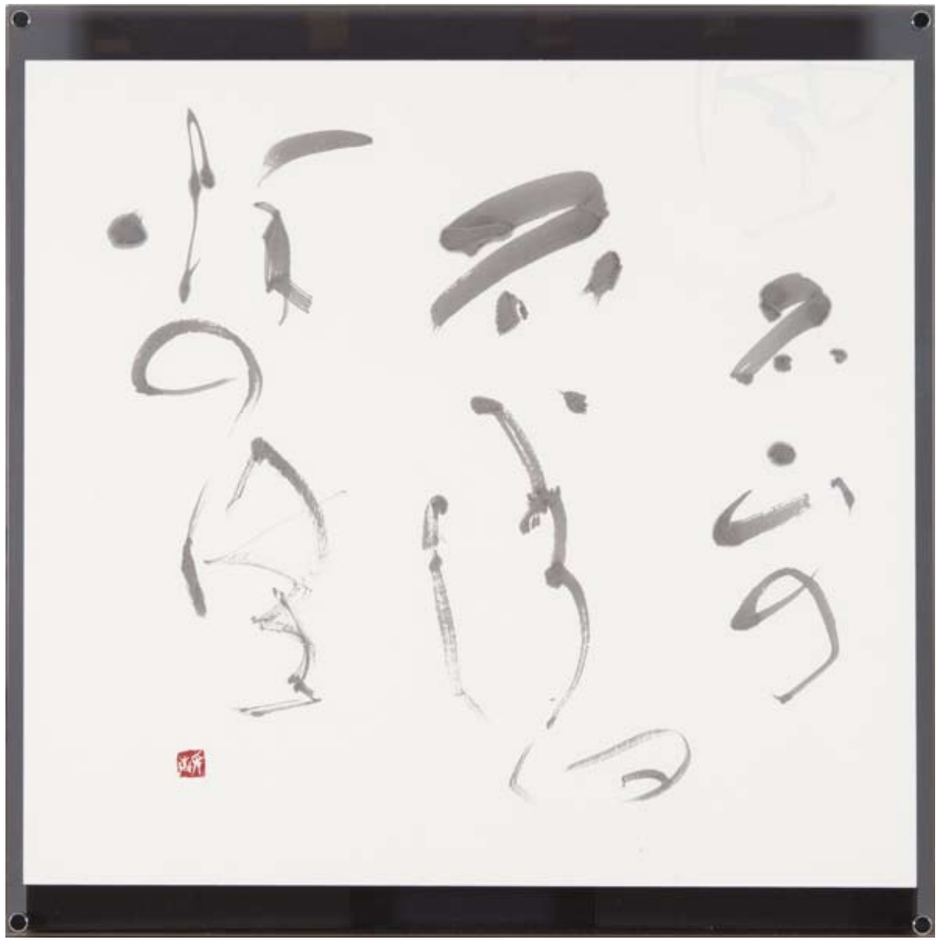
石山の石より白し秋の風

松尾芭蕉

木綿、化学染料（レマゾール染料）／蠟染
103×123.5cm

山出 勝治

奥の細道より、古くから秋風を白風とも言っていたことから、那谷寺（石川県小松市にある真言宗の寺）の白い奇岩と芒により、秋風の白く澄みわたった物淋しい様を芭蕉の心情をふまえて表現してみたかった。



60×60cm

山田 静草

白い秋の風＝清々しい風のイメージが湧きました。そこで墨色は淡墨、紙は白、マットは薄いグレーと決めました。できるだけ滲みが出ないようにふっくらとした線で表現したいと思いました。

淡墨の魅力を強く感じさせられました。「白い石」と「秋の風」を表わしたつもりですが、拙い作となりました。

五月雨をあつめて早し最上川

松尾芭蕉

絹／友禅染
150×35cm

髙橋　寛

糯糊による筒描きの友禅染です。糊を置いて染め、また糊を置いて染める、単純な技法の中で洗練していく、そのように努めています。

60×60cm

原　奈緒美

当初、芭蕉はこの句を「集めて涼し」と詠んだらしい。又「早し」が「速し」ではないので「激流」というよりは、むしろ穏やかで爽やかな印象もあったのかもしれない。

いづれにしても、題材の俳句をかな文字で流れるように表現し、淡墨と濃墨、さらに自然な色ムラのある染紙を重ねることで、川の流れや淀みを表現したいと思いました。

…色や文字を重ねることの不思議な動きや陰影・奥行き感を出したくて…

閑かさや岩にしみ入蝉の声

松尾芭蕉

綿布、反応性染料／
蠟染め、なるほど染め
126×126×5cm

福本 繁樹

この句は、「しみる」という感覚こそ日本の詩歌で重んじられる感覚であり、日本人にとって「奥」と「心」は同義であること、奥と染めが相互滲透によってその意味をふかめあっていることを示唆してくれた。それがわたしをして数年がかりで拙著『「染め」の文化』を書かせる機縁になり、染めの制作をつづける励みともなった。

閑かさと騒がしさ、悠久（岩）と刹那（蝉の声）、浸透と発露といった、「日本という方法」とされている二項同体をふまえ、蠟染めと「なるほど染め」によって芭蕉の幽玄をめざした。

60×57.5cm

越川 一香

「おくの細道」の旅で山寺立石寺に立ち、芭蕉は鳴きしきる蝉の声のかなたに広がる広大で閑かな宇宙に気づいたという。

ロマンを感じさせる。

規定サイズを最大限に活かし、スケールの大きい作をねらった。宇宙の閑けさ（静）と蝉しぐれ（動）の対照的音の世界を運筆の緩急と画数の多少で表現しようと考えた。

しかし、全体感の表現には至らなかった。

夏草や兵どもが夢の跡

松尾芭蕉

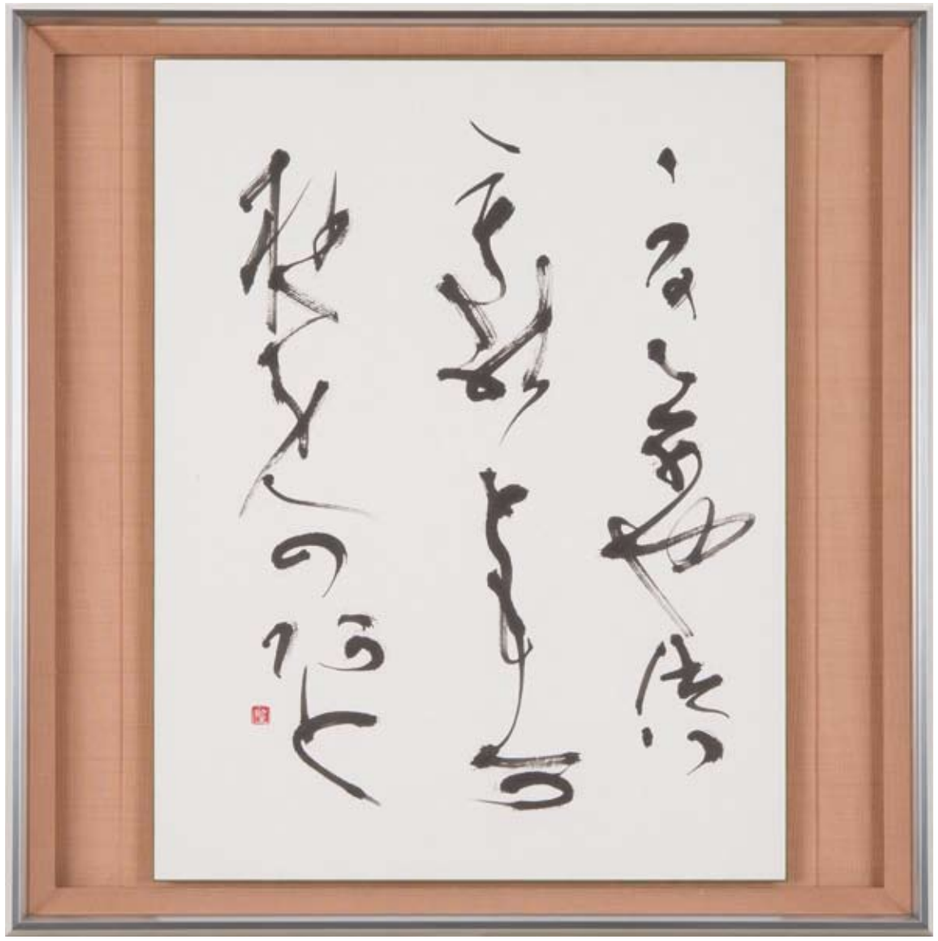
「Being pale white my grandmother」

染料、オーガンジー、木製パネル、和紙等／layer dye
220×120×42cm

賀門 利誓

そこにあったはずの営為、歴史等が、時の経過によりすっかりと無くなってしまう。

この俳句から、「喪失」をキーに制作を行った。人類の歴史は、喪失の層ではないか。



60×60.5cm

牧野 聖雲

芭蕉は、この句で悠久の自然と人間の限りある生を対峙させ、客観的思考でその無常観をポジティブに表現したと考えた。堅めの筆で破線を用い、少々荒々しいタッチで書き、人と自然がもつ強いエネルギー（生命力）を表わすことを目指した。

流れつつ色を変えけり石鹸玉

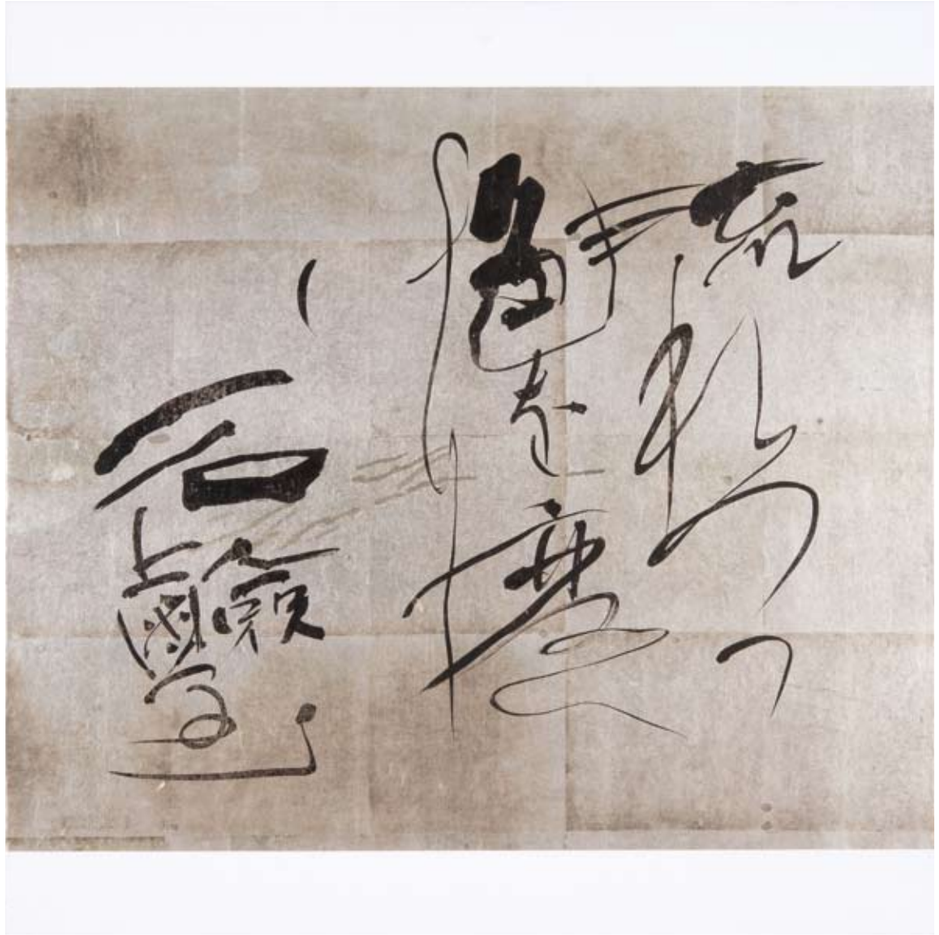
松本たかし

絹／蠟染
162×112cm

石田 寿治

17文字の世界に導かれこれまで歩んだ道での記憶とが徐徐に同化していく。俳句が持つ余白や奥行きがそうさせるのですがそれは私の追い求める作品の世界観と重なります。

今回、純に心惹かれた句を選びました。儚なく無垢な石鹸玉に思いを込めて…。これからはどこへ向かうのだろうか？



60×60cm

後谷 芳琴

生まれたしゃぼん玉は、一瞬、時の流れにのり彩りを見せ漂ってゆく。そのただよいはやがて、すっと刻の裂目へと吸い込まれ消えてゆく。しゃぼん玉の不思議を想った。

古い銀屏風の一部が一枚あり、その銀の紙に刻の移ろいを感じ、よごれの美しさの中に句を浮かばせてみようと試みた。

ただ思うままに書いた。

うりこひめ空へ勇魚が潮を吹く

倫アツコ

絹地／蝋染
141×74cm

三浦 以左子

大海に鯨が元気よく泳いでいる姿は命の神秘を秘めています。

むかし話の「うりこ姫」も私の中でその輝きを現せればと思いつつ染めました。

うりこ姫が織っている布の感じを出すために上と下をホグシました。

59×59cm

大愛 魚苑

この句から、瓜子姫の無邪気で純粋な美しさと、瓜子姫の民話の持つ陰湿さ、また勇魚（くじら）が潮を吹くといった潔さが渾然一体となった面白さを感じ、表現したいと考えました。「うりこひめ」は無邪気な可愛さを表すのに淡墨を使い、点を滲ませ丸くしました。一方で強い線の中にも揺らぎを持たせることで陰のイメージを意図。作品のまわりに余白を大きくとって、勇魚が潮を吹くといった大らかさ、広がりを表現しました。

満月の旅や手足が透けたまま

横山康夫

綿布・染料（反応性染料）／蠟防染・捺染
140×100cm

むらた ちひろ

月に寄せる想いはなぜか特別。
どこかへ連れて行ってくれる扉のような存在なのかもしれません。

60×60cm

岩永 栖邨

寒い満月の夜に宿に着く。冷えて血管が透けるようになった白い手足はしばらくしても戻らない……。何時しか老人の手足になっていたことを感じ、「旅」に自分の人生を重ねて詠んだ句と解した。
白く透き通るイメージと、冬の夜空に冴えわたる月を描いてみようと思い、アクリル板に「月」を彫り込み、アクリルを通して見てもらうことを考えた。

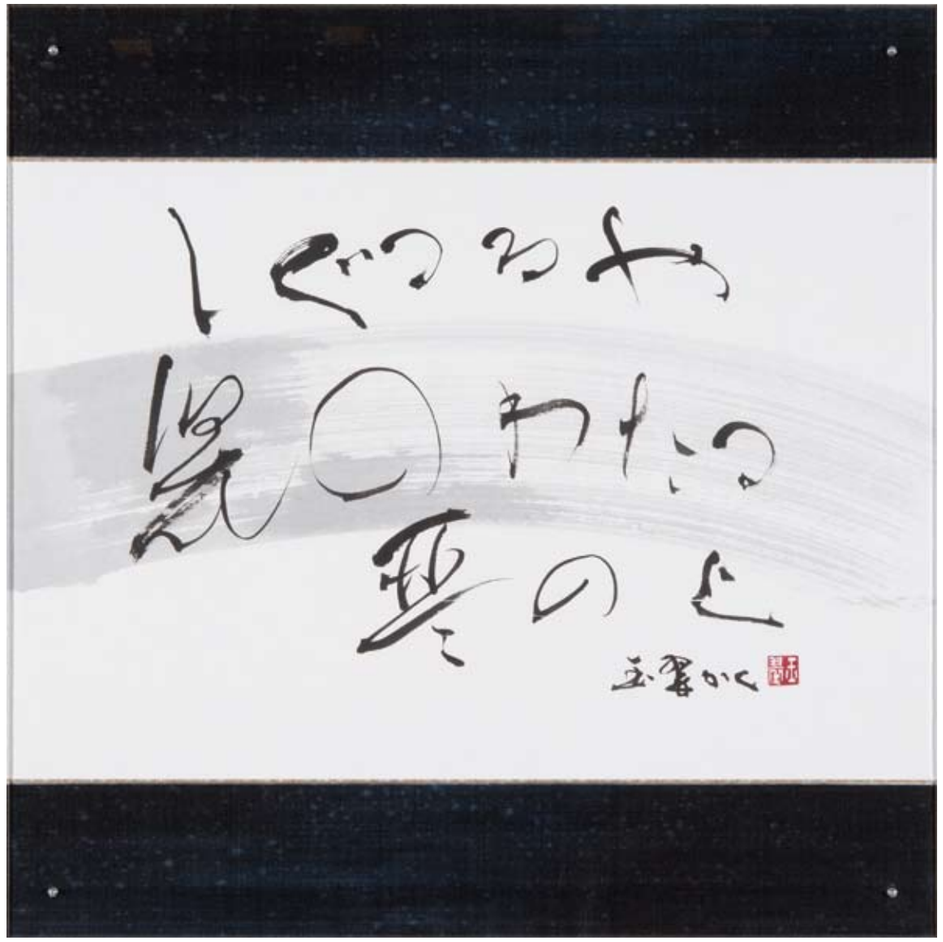
しぐるゝや鼠のわたる琴の上

与謝蕪村

綿／型染
128×50cm

澁谷 和子

寒々とした八畳の間を、又しても占拠していた二面の琴。そして三味線、鼓―。私の中で化石していた時代の吾家の風景が突然蘇って来ました。稽古事の全てを蹴散らして―。以来、能も、芝居も、文楽も、避けて通った私の越し方。少女期の抵抗でした。神棚、仏壇を荒す鼠にも四苦八苦させられたあの頃に、のどかな折角もあった様な―。ふとそんな想いに誘われるまま、選んでいた一句でしたが、俳人方にしかられそうな結末です。



60×60cm

鳥飼 玉翠

外はしぐれて冷えきった薄暗い座敷に弾きかけの琴がポツンと置かれ、その上を鼠が走りわたる姿を想像した。琴の上を鼠がわたって音をたてる様子を細くはずむ線で、また、細い玄の上で踏みはずそうとする時の格好をまるい文字形で表現。鼠の色や琴の玄の雰囲気がでるかとまん中に青墨で横線を入れて試みた。

月光西にわたれば花影東に歩むかな

与謝蕪村

麻／蝋染
152.5×104cm

柳楽　剛

この句を読んだ時、解りやすく非常に絵画的だと感じた。

月光の下で時が移りゆく情景が、十七文字で表されている。

蕪村がこの句の花影にどのような花をみていたかは不明であるが、私は夜明けに咲く泰山木の花をイメージした。

また蕪村には狐に関する句も多く、「紫狐庵」という号もあり、狐のもつあやしげな雰囲気に特別な関心を寄せていたらしい。そのエピソードにちなんで画面の片隅に狐を配した。

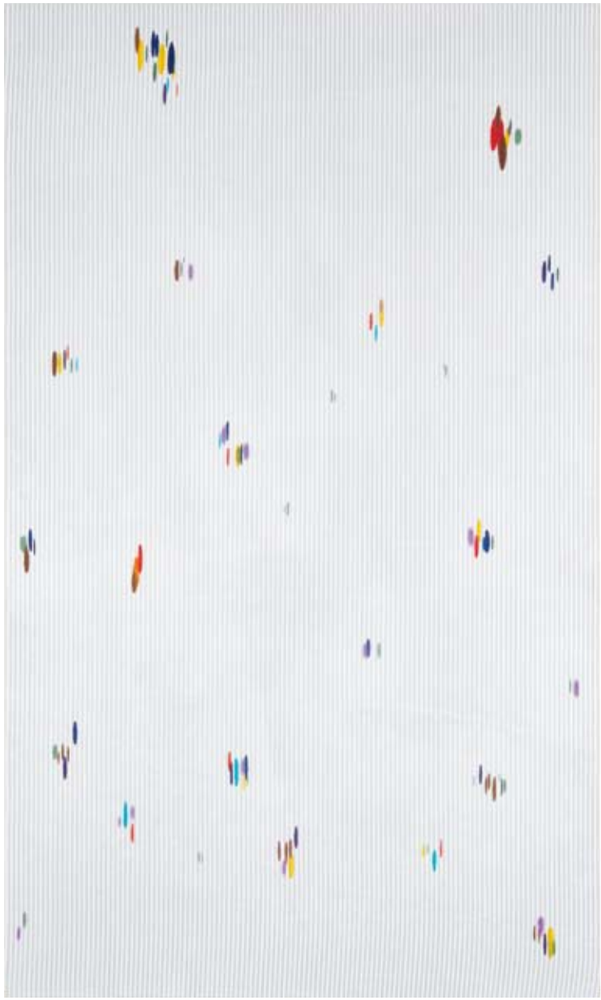
60×60cm

西川　壽一

浄土世界に背を向け、迷いの中〝生〟に執着する姿としての蕪村をイメージしたものです。聖俗ない交ぜの自己を煩悶する人間臭さをモノトーンの世界で試みてみました。

春雨や小磯の小貝ぬるゝほど

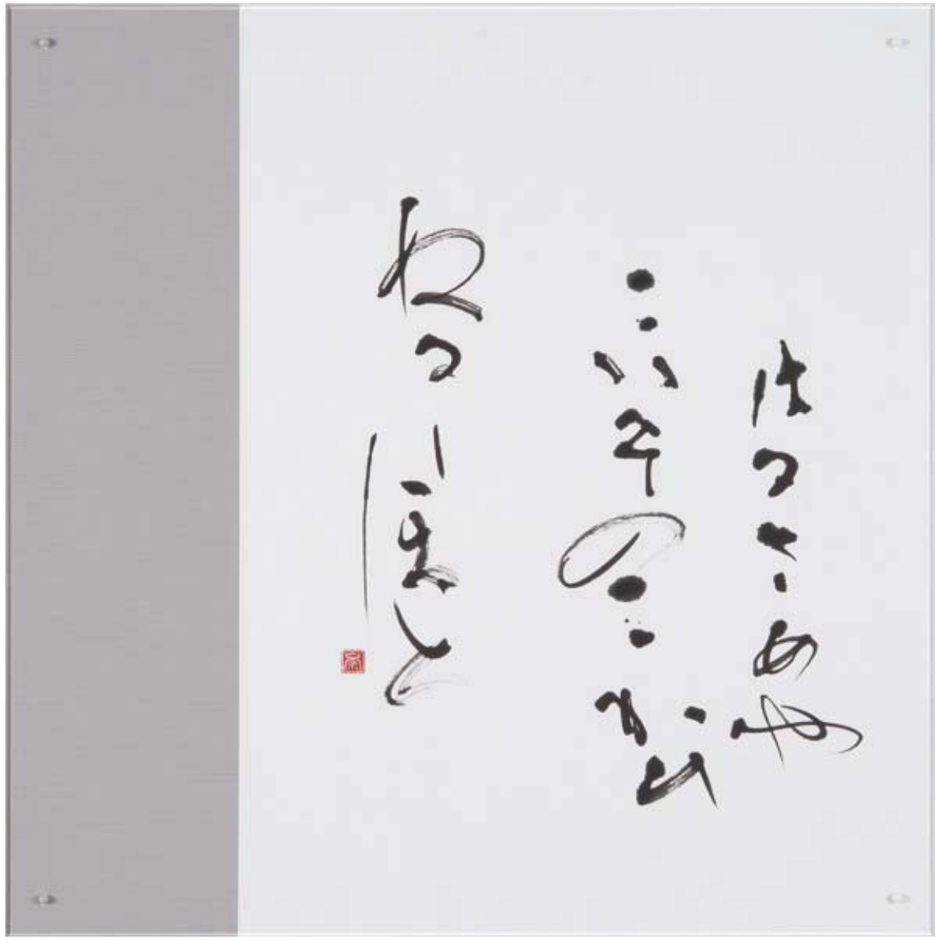
与謝蕪村



加賀城 健

「染色は制約が多くてむずかしい」というフレーズをよくきくが、私自身は制約のない自由など、取っ掛かりがなくおそろしい。俳句も同様に、制約をふまえて成り立つ面白い世界だと思う。今回選んだ蕪村の句は、ふまれた頭韻のリズムが心地よく、雨粒がやさしく貝殻に降り落ちる様を、映像として浮かびあがらせる。絵師でもあったのですね。制約のなかに永遠の景色を立ちあげる、繊細で静かな凄みを私は感じた。あやかりたい。

レーヨンサテン、綿ブロード、染料／染色
162×97cm



野村 崇

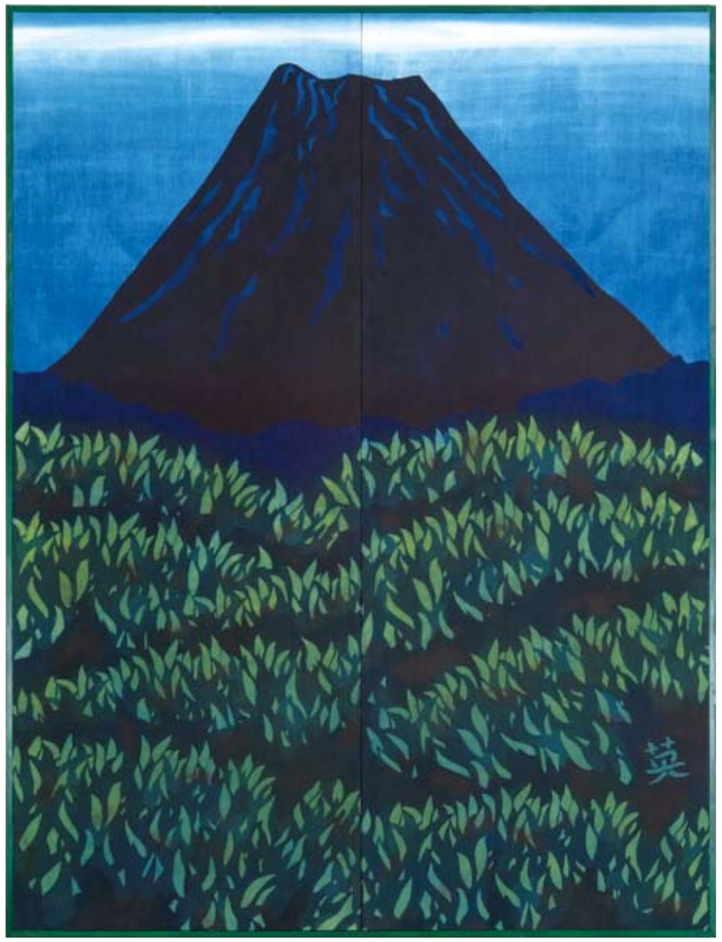
最初に句をみた時、直感で静かな柔らかいイメージを持ちました。制作終盤の晩秋から春先にかけて私が暮らしている日本海側の空や海はどんよりとした鉛色。時間の経過とともにそんな色や空気を感じるようになりました。

制作にあたり、柔らかな表情を願い胎毛筆を用い、墨色をやや緩め、全てひらがなとしました。

60×60cm

不二ひとつうづみ残して若葉かな

与謝蕪村

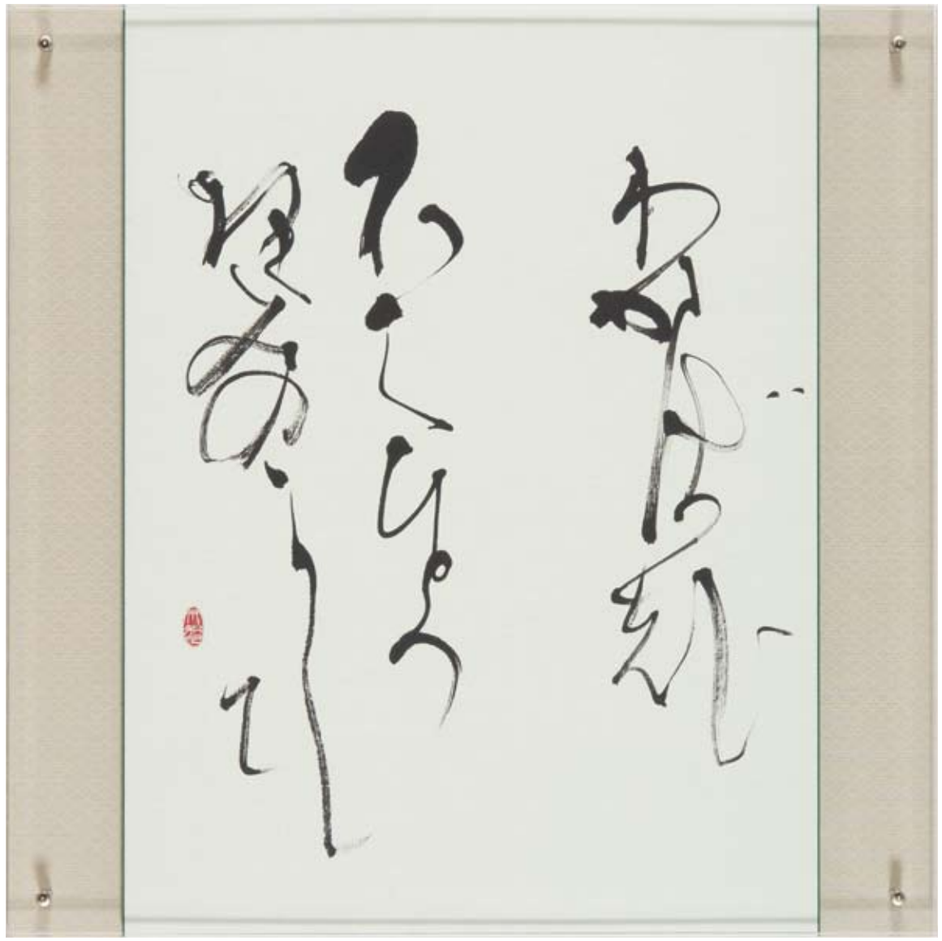


内藤 英治

夕刻の頃の富士山に、名残りの陽が差しかけ、紅富士から紫へとその神秘の色は変化していきます。宙には、ほんのりとした余韻の明るさの中、不二は大きくうづみとなっていきます。

目の前に広がる畑では、今しばらくの明るみに、若葉が踊り富士山の恵みに感謝している様に写ります。

木綿布、藍、植物染料／型染
162.8×123cm



大﨑 水愁

まわり一面若葉でうずめられている中、富士だけがうずめられず残っている様子を思いました。

「頭を雲の上に出し……富士は日本一の山」子供のころ口ずさんだ歌も浮かびました。

世界遺産にもなった美しい富士の崇高さと一面緑のさわやかさを感じ、すっきりと自然な表現をと願いました。

60×60cm

—俳句からの創造—
染と書

平成二十六年三月一日　発行

編　集　染・清流館事務局長　山本六郎
制　作　株式会社　千　手
発　行　清流会　©2014
京都市中京区室町通錦小路上ル
染・清流館内
☎075－255－5301

SOMÉ

MUSÉE DE SOMÉ SEIRYU

染、清流館